

經濟論叢

第113卷 第2・3号

日米鉄鋼業の労働生産性比較……………	行 沢 健 三	1
ナショナル・レッド会社における 正常在高法の展開……………	高 寺 貞 男	30
戦時日本の財政投融资機構と政府出資法人……	鈴 木 茂	51
第二次大戦前後のミシシッピー州農業の 資本主義的性格……………	藤 岡 惇	79
アメリカの金買入れ政策をめぐる論争……………	横 田 綏 子	103

昭和49年 2・3 月

京 都 大 学 經 濟 學 會

第二次大戦前後のミシシッピ州 農業の資本主義的性格

—プランテーションの経済構造序論—

藤 岡 惇

I はじめに

1. 問 題

アメリカ合衆国の農業発達史のなかで、南部が、南北戦争後もなおひきつづいていちじるしく後進的な地方としての地位にとどまってきたことは、広く知られている。

このような遅れをもたらした最大の原因は、一般に次の事実に求められてきた。すなわち、南北戦争によって奴隷制はくつがえされたものの、かつての奴隷制プランテーションの大土地所有は、ほとんどプランターの手に残された、という事実である¹⁾。実際、南部のなかでプランテーションが残存・普及している地方ほど、「閉鎖性、時代おくれ、新鮮な空気の欠如、『解放』された黒人にとっての牢獄のような」²⁾状態が著しいことは、多くの観察者の一致した結論となっている。プランテーションの大土地所有の存続が、奴隷制時代の経済的・政治的・文化的等の諸遺物の南部社会特に南部農業への持ち越しの最大の原因となったことは、間違いない。

1) たとえば、W. Z. Foster, *The Negro People in American History*, 1954, 貫名美隆訳「黒人の歴史」昭和45年、の第33章および Harry Haywood, *Negro Liberation*, 1948, 山岡亮一・東井正美訳「黒人解放」昭和32年の第2章を参照。

2) レーエン「農業における資本主義の発展法則についての新資料、第1分冊・アメリカ合衆国における資本主義と農業」(以下「新資料」と略記) 邦訳全集、第22巻、17ページ。

しかしながら、南北戦争後のプランテーションの経営は、奴隷制崩壊という新たな条件の下では、一定の変容をうけずには存続できなかったことも事実である。すなわち、プランテーションは、今やその大土地所有を細分して、解放黒人や白人貧民に小作させつつ、同時に、彼ら小作農を一定の監督下におくことによって、一つの経営体としてのプランテーションの機能を維持する、という新しい経営様式に移行する限りで、存続しえたのである³⁾。

さて、南北戦争後の南部農業の後進性・前近代性を規定したこのようなプランテーションを、いかなる性格のものとして理解するかという問題は、日本においては、ある限定された視角、すなわちプランテーション内の小作農とりわけ最下層に位置するとされるクロッパー *cropper* の社会経済的性格をどうみるか、という視角から主として論議されてきた。その際、小作農とくにクロッパーの性格をめぐって、二つの見解が明確に対立して提出されてきたのである。

その一つは、戦前の菊池謙一氏の開拓的な労作に代表されるものであって、小作農にいかにも旧奴隷的性格が附着しているかを、豊富な事実資料を駆使して力説する立場である⁴⁾。これは、理論的には、いわば「クロッパー＝事実上の奴隷的性格説」ということができよう。

いま一つは、戦後の大内力氏の所説に代表される見解であって、クロッパーは、小作農というよりも、「賃労働者の性格の強いもの」とみることによって、クロッパーを事実上、賃労働者と等置する見解である⁵⁾。

3) したがって例えば、南北戦争後初めてプランテーション経営を調査した1910年センサスは、それを「全般的監督の下にあるかなり広い一つづきの土地であって、その土地の全部または一部が5つ以上の小区画に分割され、小作農 *Tenant* にリースされたもの」と定義している。

4) 菊池謙一「アメリカにおける前資本制的遺制」昭和30年を参照。菊池氏はこの立場にたつて、「繁栄する」資本主義国・「民主主義の母国」アメリカの恥部を容赦なく曝きだした。守屋典郎、アメリカ棉作農業と伝統、世界産業研究会編「世界産業発達史論」昭和23年所収、も同様の立場にたっている。

5) 大内力「アメリカ農業論」昭和40年、78ページを参照。氏はこの等置によって、第二次大戦後のクロッパーの減少という現象を、南部農業における資本主義的關係の解体・後退の重要な論拠としている。また、馬場宏二氏もこの大内力の見解を踏襲している。馬場宏二「アメリカ農業問題の発生」昭和44年、129ページを参照。

以上の両者の見解は、その結論において正反対であるが、それにもかかわらず、プランテーション小作制度ないしシェア・クロッピング制度 share-cropping system という独特の生産関係を、事実上、ある等質な・一義的な規定（奴隷制的か資本主義的かという）によって把握する点で、方法上ある種の共通性をもっている。これらに対して、南北戦争後のプランテーション経済を、資本主義の発展法則の貫徹とかかわらせることによって、矛盾をはらんで資本主義的に進化しつつある経済関係として、したがってまた、アメリカ資本主義全体との内的な相互関係というより広い視野において、分析しようと試みたのが、レーニンであるといつてよい。

20世紀初頭の合衆国農業における資本主義の発展法則の貫徹を実証しようとした著作『新資料』のなかでの、当時の南部のプランテーション経済にかんするレーニンの論及は、次の4つの命題に要約することができる。

(1) 資本主義は、南部の「かつての奴隷主の巨大土地所有」(＝プランテーション的土地所有)をも、結局は独特のしかたで、「自分にあうように改造する」であろう。

(2) 南部では、10分の9が未耕のプランテーション的土地所有から「小規模な商業的農業への移行」が進みつつあり、それに伴ってそこでも「賃労働の使用はふえ」ており、資本主義が発生しはじめている。

(3) しかし今なお、奴隷制(＝封建制)の経済的遺制が非常に強力であり、南部の小農民の多くは、主にプランテーションの土地を分益小作する「すぐれて半封建的な現物小作農」という形態で存在している⁶⁾。

(4) 奴隷制の経済的遺制としての半封建的な現物小作農の南部における大量の存在というアメリカの特殊事情は、西部における未開拓地の存在というもう一つの事情とともに、一方ではさしあたりアメリカ資本主義による小農耕者の

6) この側面は「新資料」ではじめて明確に指摘されたものである。レーニンのそれ以前の南部農業論では、奴隷主的土地所有の暴力的細分とブルジョアの土地所有への転化の指摘に力点が置かれていた。例えばレーニン「1905—1907年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」邦訳全集、第13巻、273ページ参照。

収奪の「傾向を麻痺させている」が、他方では逆に、「資本主義のあすの基盤を拡大し、資本主義のいっそう急速で広範な発展の諸条件を準備するのに役立っている。」

さて、以上の資本主義の発展法則の見地にたったレーニンの所論は、南北戦争後のプランテーション経済の解明にとって、どのような意味をもっているであろうか⁷⁾。この点を判断するためには、次に提起する三つの問題を具体的に解決していく以外に方法はないのであって、その解決のためのさしあたり可能なみとおしをえること、これがわれわれの課題である。

まず第一の根本問題として、その後の発展においてアメリカ資本主義は、現実にプランテーション的土地所有を自己にあわせて改造していったのか。もしそうならば、いかなる独特の形態で改造していったのか、が検討されねばならない。

第二に、そこから派生する問題であるが、「半封建的」と形容された現物小作農の社会経済的性格は、実際にはいかなるものであり、その性格はどのような方法によれば把握できるのかという問題である。この点の解明によって、クローパーの性格についてのわが国の二つの対立した見解を評価するための一定のみとおしを得ること、これが研究史との関連でみたばあいのわれわれの課題となる。

第三の問題は、資本によるプランテーション的土地所有の改造、換言すれば現物小作農の大群の資本による収奪は、アメリカ資本主義全体の発達に対して、逆にいかなる反作用的影響を及ぼしたのか、ということである。南部の現物小作農の大群は、果してレーニンの予見どおり「資本主義の火の手」のための「新しい、巨大な、さらにいっそう燃えやすい燃料」となったのであろうか。

⁷⁾ レーニンのこの理論的見地を現代アメリカ農業論全体に発展させたものに、中野一新氏の一連の論文がある。さしあたり、中野一新、現代アメリカ農業の資本主義的性格、「経済論叢」第101巻第2号、昭和43年；現代農業における資本主義の一般法則の貫徹と集約的・商業的農業の成長、同上、第101巻第3号、昭和43年；現代アメリカ農業における巨大農場経営、同上、第102巻第3号、昭和44年参照。

以上の問題意識にたつて、われわれはレーニンの時代以降のプランテーション経済の実態にたちむかうわけであるが、さしあたり対象について三つの制限を設けることにする。

第一に時期的な限定であつて、本稿では第二次大戦前後という特定の時期に焦点をあわせる。というのは、第二次大戦前後は現物小作農の数が減少しはじめた転機であるだけでなく、南部農業のいわば「技術革命」の時期にあたる⁸⁾とされており、この時期がプランテーション経済にとって、何らかのきわだった画期をなすことが容易に推測できるからである。

第二に、ここでの分析は、この時期のプランテーションの変化過程の、いわば純経済的側面に限定される。

第三に、地域的に、南部のなかでも黒人人口の比率と農耕者中の現物小作農の比率が最も高く、プランテーションが最高の普及を示している州、すなわちミシシッピ州を対象を限定する。

2. 資料とその限界

本稿が依拠する基本的な資料は、1950年度合衆国農業センサス U. S. Bureau of the Census, *1950 Census of Agriculture* (以下 *1950 Census* と略記) に記載された農場の「経済階層」economic class 別統計集のミシシッピ州関係部分である⁹⁾。

この経済階層¹⁰⁾ 別統計は農場経営規模を正確に反映する指標としての農産物の年間販売額を唯一の基準として、農場を7階層に分類したうえで、各階層ごとの詳細な経営諸指標をわれわれに与えてくれる。

⁸⁾ 例えば、主として南部の棉作農業のこの時期における技術上の巨大な変化を概説した J. H. Street, *The New Revolution in the Cotton Economy*, 1957 や J. L. Fulmer, *Agricultural Progress in the Cotton Belt since 1920*, 1950 を参照。また「技術革命」の開始期をとりあつかったニュー・ディール機関の報告書として、W. C. Holley, L. E. Arnold, *Changes in Technology and Labor Requirements in Crop Production Cotton*, Works Progress Administration, *National Research Project Report*, No. A-7, 1938 が有益である。

⁹⁾ 直接利用する部分は、「郡および〔州内〕経済地域」別統計をあつかう第1巻の第22分冊(「ミシシッピ州」)(以下 vol. 1, pt. 22 と略記)および州別統計をあつかう第2巻の第12章(「農場の経済階層」)(以下 vol. 2, chap. 12 と略記)とである。

ところでこの統計では、その性格上一切の土地所有諸関係や流通・交易諸関係、それに人種の諸関係等が捨象されており、したがってこの統計に依拠する本稿の分析は、いくつかの点で決定的な抽象性=限界をおびざるをえない。

すなわち第一に、この統計集は、現実には特有の土地所有関係によって媒介されて多かれ少なかれ一経営体として機能しているプランテーションを、その諸構成部分に分解した姿で、すなわちプランターの直接経営部分 home farm と小作農によって分益小作されている部分とを、それぞれ独立した経営であるかのように表示しているのである。つまりこの統計集では、これらの諸部分によって構成されている一つの経営体としてのプランテーションは、完全に消失しており、そのかわりにプランテーション内の多少とも非独立的な諸構成部分があり、「経営」(「農場」)として独立化されている¹⁰⁾。したがって、本稿でも、「経営」・「農場」という概念をこのような意味において使用しており、そのことによってプランテーションそれ自体をここから直接具体的に把握することは不可能になっている。

第二に、一般にセンサスは農場間の流通・交易諸関係を描きだす諸指標を与えないという理由によって、本稿では農業経営者が、農産物の買占人や高利貸を兼ねているかどうかという側面を分析することができない。

第三に、この統計集を利用する限り、農業経営者が白人であるか黒人であるかということが全くわからないのであって、したがって本稿ではミシシッピ州農業内部の広く知られた深刻な民族問題の経済的基礎に触れることができない

10) センサスは農場を7つの経済階層に分類している。すなわちクラスⅠは年間農産物販売額 25,000ドル以上の農場、クラスⅡは10,000~24,999ドル、クラスⅢは5,000~9,999ドル、クラスⅣは2,500~4,999ドル、クラスⅤは1,200~2,499ドル、クラスⅥは250~1,199ドル、であって同時に経営主の農場外労働日数が100日未満かつ農場主一家の農場外からの所得が農産物販売額より少ない農場、その他の農場 other farm (以下 o. f. と略記) は1,199ドル以下であってクラスⅥに属さない農場である。(1950 Census, vol. 2, pp. xxx-xxx 参照)。

11) 「土地が賃借……されたり、分益という条件でクロッピングされた場合、地主側が当該地の経営権を行使している時でも、小作農またはクロッパー側が農場経営者とみなされるのであって、地主は小作農またはクロッパーに貸しつけていない土地部分だけの経営者とみなされる。」(1950 Census, vol. 2, p. xxx.)

い。

しかしながら、他方では、この統計集の利用は、その抽象性のゆえにかえって、やにわにプランター・小作農関係といった具体的次元で対象に立ち向ったときあいまいどならざるをえない一つの側面、すなわちプランテーションの諸構成部分＝「農場」を含んだ農場群における直接的生産過程の実態、したがってまたこれら農場群の相互関係の経済的進化の実態をくっきりと写しだす点で有利な条件をそなえている。このいわばそれ自体としての諸「経営」の経済的性格の検出は、次稿以下に予定している土地所有諸関係やプランテーション的諸関係総体の一層具体的な分析のための、抽象的だが不可欠な基礎作業としての意味をもっている。

II 農場の資本主義的相互関係 (1949年)

まずセンサスの調査時点(1949年4月)におけるミシシッピ州農業の一般の特徴を大づかみするため、経済階層(以下クラスと略記)別の農場数の比率を検討しておこう(第1表参照)。

ミシシッピ州は、大規模な農業経営の発達という点では、全国水準からはもちろん、南部全体の水準からもはるかにたち遅れており、合衆国における農場中の大経営(クラスI, II農場)の比率の最小の諸州の典型となっている。その比率は、全国9.0%, 南部地方4.1%に対して同州は僅か1.2%にすぎない。他方、ミシシッピ州は零細経営(販売

第1表 農場のクラス別比率 (%)

地 域	全 国	南 部	ミシシッピ州
クラス			
合 計	100.0	100.0	100.0
クラス I	1.9	1.1	0.4
II	7.1	3.0	0.8
III	13.4	5.7	1.6
IV	16.4	12.2	6.3
V	16.8	19.3	20.7
VI	13.3	19.6	32.5
o. f.	31.1	39.2	37.6
農場実数(万)	537.9	265.1	25.1

出所 1950 Census, vol. 2, chap. 12, tab. 2より作成

額1,200ドル未満の農場群、つまりクラスVIと o. f. をその指標にとる)の最大の比率を有しており、全国44.4%、南部地方58.8%に対して同州の零細経営の比率は突に70.1%にも達している。

また、労働生産性の近似的指標である1農業従事者あたりの平均販売額を計算すれば¹²⁾、全国平均では2,340ドルに対して、同州では850ドルという結果が得られる。したがって、同州の農業労働の生産性は、全国水準と比べて極度に低いことが窺われるのである。

ところでわれわれの問題は、こうした零細経営が圧倒的多数を占め、全体として生産力が極めて立遅れているという事態によって一般的に特徴づけられるミシシッピ州農業にあって、農場の相互関係が、どのような経済的性格をおびたものとして現われているかを解明することである。このためには、センサスから主要な経営指標、すなわち賃労働(年間賃金支出額)・機械使用量(その指標として年間石油燃料支出額)・製品(年間農産物販売額)・土地(農場面積)に関する諸数値を抽出し、これら4つの指標のクラスごとの分布比率を集計してみな

第2表 クラスごとの経営指標分布

指標 クラス	農場数の 比率 (%)	経営指標の分布 (%)			
		賃金支出額	石油燃料 支出額	農産物 販売額	農場面積
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
クラス I	0.4	41.7	26.3	16.4	7.8
II	0.8	18.5	16.6	8.8	6.4
III	1.6	10.2	12.6	8.0	6.8
IV	6.3	9.6	14.1	15.5	10.4
V	20.7	8.9	13.7	26.4	17.7
VI	32.5	4.6	7.8	16.3	22.8
o. f.	37.6	6.6	8.9	8.6	28.2
I農場あたりの 平均実数	—	176 ドル	66 ドル	1,440 ドル	82.8 エーカー

出所 1950 Census, vol. 2, chap. 12, tab. 2・4・31・33・36 より作成。

12) 1950 Census, vol. 2, chap. 12, tab. 29・30・36 より計算。

ければならない。その結果が第2表である。この表は、農場の経済的相互関係を示す基本的事実を与えているから、各側面から検討をくわえていく必要がある。(その際、クラスⅠ・Ⅱを大経営、クラスⅢを中経営、クラスⅣ・Ⅴを小経営、クラスⅥ・o.f.を零細経営と一括して検討していくことにする。)

1. 賃労働

まず、資本主義的生産関係の最も直接的かつ本質的な指標たる賃労働の使用度に注目しよう。

同表から読みとれることは、僅か1.2%の大経営(クラスⅠ・Ⅱ)が、全賃金支出の60.2%を集積しているのに対して、70.1%もの零細経営(クラスⅥとo.f.)が、あわせて全賃金の11.2%しか支出していないという関係である。このような賃労働使用の大経営への極端な偏りは、個々の大経営における巨額の賃金支出と個々の零細経営の微々たる賃金支出の結果に他ならない。すなわち、第2表からの簡単な計算によれば、労働力の購入にクラスⅠは年間平均18,348ドルもの巨費を投ずる。クラスⅡは平均4,070ドル、クラスⅢでも1,122ドルを支出する。これに対してクラスⅥは僅か25ドル、o.f.は30ドルを支出するだけである。

それでは、各クラスの農場は、その賃金支出額によって現実に何人の賃労働者を雇っており、全体としてどの程度賃労働に依存した経営をおこなっているのか。第3表は、1950年4月の調査時の各クラスの農場で現実に働らいていた賃労働者数・「家族従事者」(経営主一家の労働力)数・その合計としての農業従事者総数の平均を与えている¹³⁾。

まず第一に、この表は、各クラスの経営がどの程度賃労働に依存しているか

13) 4月は、ミシシッピー州農業にとって、労働力需要がほぼ中位の水準にある季節である。例えば、1942年度の同州農業の月別必要労働量の調査報告書は、4月の必要労働量が、最低水準の1月(150万労働日)と最高水準の5月(959万労働日)との中間の621万労働日であることを明らかにしている。(Farm Labor Requirements in Mississippi, *Mississippi Agricultural Experiment Station* [以下 M. A. E. S. と略記] *Bulletin* 387, June 1943 参照。)したがって、第3表は年間を通じてのほぼ平均的な賃労働者数・家族従事者数を示しているとみてよい。

第3表 I 農場の労働力構成 (1950年4月) (人)

経済階層	賃労働者数 (1)	家族従事者数	農業従事者総数
クラス I	22.2	1.2	23.4
II	5.0	1.4	6.4
III	1.4	1.6	3.0
IV	0.3	1.6	1.9
V	0.1	1.5	1.6
VI	0.0	1.5	1.5
o. f.	0.0	1.5	1.5
平均	0.2	1.5	1.7

(1) 1950年4月の賃労働者総数を各クラスがその年間賃金支出額の比率で雇用すると想定して計算。

出所 1950 Census, vol. 2, chap. 12, tab. 29・30・33 より作成。

を明示してくれる。大経営では、すでに決定的に賃労働に依存していることがわかる。とりわけ平均22人強もの賃労働者を使う一方、経営主一家が農業労働から解放される度合いの最も進んだクラスI農場だけに着目すれば、賃労働に全面的に依存した経営の姿、経営主の純然たる資本家化の姿が、一層鮮やかに浮きでてくる。中経営(クラスIII)では、平均1.4人の賃労働者を使っており、賃労働者は全農業従事者の半数近くに達する。そのゆえ、中経営はすでに賃労働なしには経営がなりたたなくなりはじめた階層であることがわかる。小経営(クラスIV・V)は、総じて賃労働依存の比較的少ない層である。零細経営にあっては、賃労働の使用はほぼゼロであるだけでなく、逆に多かれ少なかれ賃労働にたずさわることなしには生活を維持できなくなっている¹⁴⁾。

第二に第3表全体を総括すれば、大経営内の賃労働者数は異常なほど多数に達しており¹⁵⁾、農業従事者数の点での大経営と小経営・零細経営との分極化は

14) 例えば、農場外所得の方が農産物販売の収入より多い、すなわち生活の重心をすでにプロレタリアの方に移した農場は、小経営のばあいその13.6%であるが、零細経営のばあい36.9%に達する。(1950 Census, vol. 12, chap 12, tab. 7 より計算。)

15) 第3表と同様の方法で、1農場あたりの賃労働者数の全国平均を計算すれば、クラスIで6.0人、クラスIIで1.0人であり、ミシシッピ州の大経営内の賃労働者数は、全国水準の4～5倍にも達している。しかしこの現象は後に第6表が示すように、同一販売額の農産物の生産に全国水準よりはるかに大量の労働量を投下しなければならない同州大経営の技術的後進性の反映にすぎない。

極度に深刻になっていることがわかる。農業従事者数のこの巨大な格差に規定されて、大経営だけが、農業従事者の諸労働を広範な協業とある程度の分業という関係へ組織することができるという事情を指摘しておかねばならない。実際に多くの文献が示すように、同州の大経営の労働様式のなかで、単純協業によって遂行されないような作業行程をみいだすことは難しい¹⁶⁾(例えば棉花の摘みとり時には、大量の日雇いや幼児まで動員して、最も広範な協業的労働が組織される)。それだけでなく大経営では、この協業の基礎上で農業従事者間の分業が、自然的条件の設ける障害を迂回しながら¹⁷⁾ある程度組織されている(棉花と畜産の「商品別分業」、管理労働と肉体労働、機械運転と手労働等々)。協業・分業という諸関係は、一般に生産力の増大を反作用的に生み出すのであって、そのゆえこれら諸関係の大経営による排他的採用は、生産力の点での大経営のその他の経営に対する優越(後述)の一つの基礎となっていることは疑いない。

2. 労働手段

ミシシッピー州農業の技術的進歩は、いかなる経営によって担われているのか。多数の賃労働者の使用が確認された大経営は、技術的進歩といかなるかわりがあるのだろうか。

センサスの農業機械統計のなかで、技術的進歩の最良の指標を与えるのは、トラクター所有統計である。そこで第4表をみれば、全農場平均のトラクター所有率は、まだ13%強にすぎないのに、ほとんどの大経営はすでにトラクターを所有していること、一般に大規模農場になるほどトラクターを積極的に導入していることが確認される。しかしこの表からは各クラスでのトラクター(さ

16) 概して農業は単純協業がそのものとして現われやすい産業の一つである。事実マルクスは単純協業を説明するための例示の多くを農業労働に求めている。マルクス「資本論」第1部 第11章参照。

17) 耕種農業に固有の、作物の生長が季節の進行によって規定されるという事情は、「作業部分別分業」の展開にとっての自然的障害をなす。この事情が、農業生産部門における社会的分業の展開をも制約し、農業における労働の社会化と生産力上昇をたち遅れさせていることは、つとにA. スミスによって指摘されている。A. スミス「国富論」邦訳岩波文庫版(1) 102-103ページ参照。なお「商品別分業」・「作業部分別分業」の概念については、レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」邦訳全集、第3巻、396ページ参照。

らに機械一般)の実際の使用量を知ることはできない。

機械一般の使用量を反映する指標としては、第2表に示した石油燃料支出額をあげることができる。全農場の1.2%の大経営が、石油燃料への年間支出額の42.9%を集積しており、他方70.1%を占める大量の零細経営は僅かその16.7%を支出するにすぎない¹⁰⁾。もっとも、すでに確認したように、大経営ほど多量の労働力を使用しているのだから、この資料だけで、大経営が最も機械に依存した経営をおこなっているとは速断できない。この点を知るためには農業従事者1人あたりの石油燃料支出額を比較しなければならない(第5表)。

第5表によれば、農場の大規模化につれて農業従事者1人あたりの石油燃料支出額もまた、ほぼ規則的に上昇していることがわかる。すなわち大経営たとえばクラスIIの1農業従事者は、クラスIVの従事者の2.7倍、クラスVの7.6倍、そして零細経営の実に19.4倍もの石油燃料を使用・消費している。

以上の分析から次の結論がでてくる。すなわち、大規模な農場ほど農業労働力(大経営ではほとんどが賃労働者)は機械を大量に使用し(大量の機械一資本によ

第4表 トラクター所有率の
クラス別比較(%)

クラス	農場のトラクター所有率
I	94.6
II	80.6
III	66.0
IV	36.0
V	17.5
VI	7.5
o. f.	7.8
平均	13.3

出所 1950 Census, vol 2, chap. 12, tab. 19 より作成。

第5表 1人あたりの石油燃料支出額(ドル)

クラス	1農業従事者あたりの石油燃料支出額
I	185
II	214
III	173
IV	78
V	28
VI	11
o. f.	11
平均	39

出所 各クラスの1農場あたりの石油燃料支出額を第3表で与えられた農業従事者数で除した。

¹⁰⁾ 第2表からの計算によれば、クラスIの石油燃料支出額は、クラスIIIの8.3倍、IVの29倍、Vの99倍、そして零細経営の実に271倍にも達する。

って装備＝包摂され)、そのことによって生産力を高めている。そしてこのことは、大経営が農業の技術的進歩を担う先頭にたっていること、逆に膨大な小経営と零細経営とは技術的進歩から大きくとり残されていることを意味している。

3. 農業の集約化

すでにみたように、農場の大規模化に伴って1農場あたりの賃金支出額も、機械への支出額も、したがって投下資本総額もまた急激に増大することは明らかであるが、そのばあい単位農場面積あたりの投下資本総額は、どのような傾向を示しているだろうか。

第2表にたちかえって、各クラスの賃金支出額の分布比率を農場面積分布比率で除してみよう。その結果、o. f. で0.23, クラスVIで0.20, 以下上層にいくにしたがって0.50 (クラスV), 0.92 (クラスIV), 1.50 (クラスIII), そしてクラスIIで2.89, クラスIで5.35という数値がえられる。要するに単位面積あたりの「可変資本」投下が規則的に逡増していく傾向が読みとれるのである。次に、「不変資本」の一指標としての石油燃料支出額分布比率を、同じく農場面積分布比率で除してみると、0.32 (o. f.), 0.34 (クラスVI), 以下順次に0.77 (V), 1.36 (IV), 1.85 (III), 2.59 (II) そして3.37 (I) という同様の数値がえられ、単位面積あたりの「不変資本」投下もまた、規則的に逡増している傾向が窺われる。したがって、農場の大規模化が、農業経営の集約的性格の強化を伴っていることは明らかである。

4. 労働の生産性

これまでの分析によって大経営は、協業と分業の利用や機械の大量使用の点で、すなわち、生産力増大の動因たる労働の社会化と技術的進歩の前進を示す諸指標の点で、小経営や零細経営に対して優越していることがわかった。ところで大経営は生産力の直接的指標としての労働の生産性それ自体の点でも優越した地位を保っているのだろうか。この点の検討は、諸経営間の経済的優劣関係を総括する上で大きな意義をもっている。

第6表は、労働生産性の近似的指標たる1農業従事者あたりの農産物販売額を与えている¹⁹⁾。第一に、クラスI農場は労働生産性の点で、全国水準の $\frac{1}{2}$ の高さにも達しないばかりか、全国のお全農場平均をも下まわるという異常に低い・遅れた水準にあることがわかる。

しかし、第二に、ミシシッ

ピー州の内部だけをとるとき、ここでもやはり全国平均よりはるかに緩慢であるものの、労働生産性の上層への規則的な上昇の傾向がみいだされるのである。要するに、労働生産性がきわめて低いという一般的环境の下でも、大経営はより小規模な経営（とくに小経営や零細経営）に対して労働生産性の点でも明らかに優越している。そしてこの事情は、大経営がより小規模な経営駆逐のための基本的な競争手段の一つを確保していることを示している²⁰⁾。

以上の分析結果は次のことをすなわち、ミシシッピー州の大経営の生産過程には、資本主義的諸関係の主要な諸特徴（大量の賃労働の使用、1従事者あたりの最大量の機械の駆使、集約的経営、最高の生産力）が、くっきりと現われている²¹⁾こ

第6表 1農業従事者あたりの農産物販売額の比較 (ドル)

	ミシシッピー州	全 国
クラス I	2,290	7,470
II	2,280	5,360
III	2,200	3,340
IV	1,740	1,910
V	1,080	1,070
VI	450	480
o. f.	250	310
平 均	850	2,340

出所 1950 Census, vol. 2, chap. 12, tab. 29・30・36
より作成（1桁目を四捨五入）。

19) 二見昭氏はこの方法を使って合衆国全農場のクラスごとの労働生産性を比較している。二見昭「現代アメリカ農業の構造」昭和40年、112-113ページ参照。

20) 「[合衆国の一引用者] 上層農の労働生産性の高さは、当然その農業生産費を下層農に比して安くすることにより、前者の競争上の優位性を決定的なものとし、上層農による下層農の駆逐を促進する基本的要因となっている。……」(二見昭、前掲書、113ページ。)

21) 合衆国のマルクス主義者パロ V. Perlo も、1950 Census を分析して次のように結論している。「[南部では一引用者] 企業の経営として営まれる完全に資本主義的な農業は……このクラスI、IIの比較的少数の大規模農場に集中している。」(V. Perlo, *The Negro in Southern Agriculture*, 1953, p. 55.)

と、そのことによって大経営は、孤立分散した・技術的にたち遅れた・粗放的な・生産力の低い・膨大な経営群（全農場の97%を占める小経営・零細経営）と際だった対照をなしていることを物語っている。

III 農業の資本主義的性格の深化（第二次大戦前後）

前節では1949年の時点で、経営面からみた農場の相互関係が、資本主義的性格をおびていることを確認した。このような相互関係は、先行する時代におけるミシシッピ州農業のどのような具体的変化過程の歴史的産物であったのだろうか。その変化過程は農業資本主義の強化・発展を意味していたのか、それともその衰弱・解体を意味していたのだろうか。第二次大戦前後の時期に焦点をあわせてこの問題を検討してみよう。その際、われわれは1940年、45年、50年の各農業センサスの統計を利用することができる。

1. 農業の商業化の進展

第二次大戦前後とりわけ1940年代の10年間にミシシッピ州の農業経営に生じた重要な変化として、まず農業の商業化の進展をあげることができる。事実、第7表によればこの10年間に、商品として販売される農産物の総額は、2.9倍に

第7表 1940年代の農業の商業化の進展

農産物種類		総販売価額(万ドル)		増加率(%)
		1940	1950	
全農産物		11,535	33,873	294
内訳	農作物	9,713 (15,238) ⁽¹⁾	25,102 (36,169)	258 (237)
	酪農製品	713	2,533	355
	牛、豚、鶏の 販売	936	5,470	584
	その他	173	768	444

(1) () 内は、農作物の総生産価額を示す。

出所 1950 Census, vol. 1, pt. 22, state table 11・12 より作成。

増大した。この間に農場数は29.1万から25.1万に減少したのであるから、この間の農産物価格の一般的騰貴を考慮に入れたとしても農業の商業的性格の急速な深まりは疑いえない事実である。

次に農産物の種類ごとに変化をみてみよう。まず第一に、売却された農作物 crop の価額は2.6倍に増大した。他の農産物の価額が一層大きく増大したので、商業的農業全体のなかでのその比重はやや低下したが、なおその比重は弱に達している(この商品農作物の圧倒的部分を占めるのは棉花であって、棉花は今なおミシシッピー州の商業的農業における中心的な商品である²²⁾)。なお、農作物については、総生産価額のデータも与えられているので、この10年間の農作物の商品化率の変化を知ることができる。それによれば、その商品化率は1940年の63.7%から1950年には69.4%へ増大したことがわかる。したがって商業的な農作物生産の発達は、農作物のますます大きな部分の市場向け商品への転化と自家消費される農作物部分の相対的減少と結びついていることは明らかである。

第二に、他の農産物部門とくに酪農と肉用畜産部門における商品生産は、農作物よりはるかに急速に成長した(販売額の点で酪農は3.6倍に、鶏・牛・豚の売却は5.8倍に増大)。その結果同州農業は、はるかに多様化 diversification された商品農産物をもつことになった²³⁾。またこのような農業における商品生産の多様な展開は、諸文献の示すように²⁴⁾、個々の農場における特定商品農産物生産への専門化として現われたことを強調しておかねばならない。要するに農業の商業化は、ミシシッピー州でも、農業内の社会的分業の深まり(自家消費経済の衰退と農業生産の専門化)を通じて、したがってまた農場労働の社会的性格の強

22) 1949年度のミシシッピー州の農場経営主は、その全農産物販売収入の約8%を棉花の売却から得ていた。これは合衆国で最高の比率である。

23) 多様化された商業的農業の地域別分布については、D. G. Miley, Commercial Agricultural Production and Marketing Methods and Facilities in Mississippi, *M. A. E. S. Bulletin*, 394, Oct. 1943 に詳しい。

24) 「農業生産全体における多様化は、個々の農業者にとっての専門化(つまり多様化の逆)の進展を意味する。」(V. Perlo, *op. cit.*, p. 42) また、J. H. Street, *op. cit.*, p. 55 にも同様の指摘がある。

化(市場=万人のための労働, 生産者の社会的分業・交通・交流の網の目への包摂)をもたらしながら, 着実に進展しているのである。

2. 資本主義化の前進

農業の商業化の進展という条件の下で, 大経営と小経営との相互関係にはどのような変化が生じたのであろうか。この変化を知るためには, クラス別農場数の時系列的比較を試みなければならない。しかしその比較は, 第一に各センサス間の調査方法の変更, 第二に農産物価格の変動によって妨げられている。前者の理由によって, クラス別農場数の比較は1945年と50年の間以外は不可能である。但しそのばあいでも後者の理由によって, その5年間の農産物価格の上昇(約25%)分だけ1945年の販売額を増備しておかなければ, 正確な比較にはならない。以上の方法を用いたパーロの計算を利用することによって, われわれは, 各クラス別農場数の増減比率を次のように算出した(第8表参照)。

クラスⅣ・Ⅴ(小経営)が大きく減少し, クラスⅠ・Ⅱ・Ⅲ(大経営・中経営)が著増し, 零細経営層なかでもプロレタリア的性格の強いと考えられるその下半分の経営がめだって増加していることがわかる。特に興味深いのは, クラスⅠ・Ⅱ・Ⅲの内部でも, 上層になるほど増加率が遡増していることであって, 資本主義的性格の最も強いクラスⅠでは増加率は最高(2倍強)に達しているほどである。したがって第8表全体の物語る基本的事実は, 小経営が最も不安定な動搖的地位におかれており, 小経営の資本主義的な大経営による駆逐(多数の小経営の半プロ的な零細経営への転落と大経営の強化)が急速に進行している⁽¹⁾ということ以外にはありえない。小経営を犠牲にしての

第8表 クラス別農場数の増減率(%)

	1945年～50年の増減率
クラス Ⅰ	109.5
Ⅱ	51.6
Ⅲ	38.3
Ⅳ	△ 19.6
Ⅴ	△ 38.4
250～1199ドル ⁽¹⁾	2.4
249ドル以下 ⁽²⁾	61.3
平 均	△ 3.6

(1) クラスⅥと o. f. の上半分を含む農場群。

(2) o. f. の下半分からなる農場群。

出所 V. Perio, *op. cit.*, p. 65 の表から計算して作成。

大経営への生産の集中が進んでいるのである²⁶⁾。

いうまでもなくこの駆逐は、各農場間の経済的敵対を不可避的に激しくする農業の商業化の進展という条件下で、農場間の経済的矛盾の総体によってひきおこされたものであるが²⁷⁾、ここでは、重要な矛盾の一つたる大経営と小経営との間の農業技術上の格差が、この間に拡大していった事実を指摘しておこう。すなわちこの間に、ミシシッピ州の農業機械化は急速な進展をとげたのであるが（例えば1935—50年の間にトラクター台数は約10倍に激増²⁸⁾）、この機械化はすでに検討したように、現実には大経営への機械の集中的導入の進行として現われたのであるから（第4表参照）、大経営の農業技術上の優越の促進以外の結果をもたらさなかったのは、見やすい道理である。

さてこのような小経営の分解による資本主義的な大経営とその対極の半プロ的な零細経営の強化の傾向は、全農業生産に占める資本—賃労働関係の比重の増大（農業の資本主義的性格の深化）をひきおこさないわけにはいかない。このことは、家族従事者数の減少と賃労働者数の増大となって集中的に現われてくる。ここでは、必要な数値をえるために、家族従事者数についてはその季節時変動が軽微なので、各センサスの調査時におけるその実数をそのまま比較する。他方、賃労働者数は季節の変動が極めて大きく各センサスの実数をそのまま比較できないので、一年に150日間働く常雇い労働者数に換算する²⁹⁾。このようにして算出したのが第9表である。

25) パーロは、この過程が、「まことに恐るべき……異常なスピード」で進んだと述べている。
V. Perlo, *op. cit.*, p. 66 参照。

26) 土地の集中については、10年間(1940—1950)のデータがある。それによれば作付面積1000エーカー以上の経営数は56.1%、260～999エーカーの経営数は20.6%増加したが、それ以下の経営群では全て減少した。(1950 Census, vol. 1, pt. 22, state table 2.)

27) 「農民のあいだでのすべての経済的矛盾の総体こそ、われわれが農民層の分解とよんでいるものを成している。」(レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」邦訳全集、第3巻、165ページ。)

28) 同州のトラクター保有数は、1935年の約5,000台から1940年の10,600台、1945年の21,500台へと急増し、1950年には52,400台に達している。(1950 Census, vol. 1, pt. 22, state table 8.)

29) したがって賃労働者数の算出は、当該年度の賃金支出総額を同州の農業労働者の平均日給×150で除すことによっておこなった。すでに中野一新氏は「巨大農場」の賃労働雇用数を推定するのに、この方法を用いている。中野一新、現代アメリカ農業における巨大農場経営、「経済論叢」第102巻第3号、昭和44年、54ページ参照。

家族従事者数は、1940年に25%だけ減少したのに対して、賃労働者数は逆に50%近くも増加したこと、その結果家族従事者に対する賃労働者の割合は、この間にもちょうど2倍になったことが明瞭に示されている³⁰⁾。

第9表 賃労働者の比重の増大

	1940年	1945年	1950年
(a) 家族従事者数 (人)	410,910	335,217	307,513
(a) 賃労働者数 (人)	59,210	61,489	85,434
(b)/(a)	0.14	0.18	0.28

出所 家族従事者数は 1950 Census, vol. 1, pt. 22, state table 9. 賃労働者数は *ibid.* および *Agricultural Statistics 1940, 1945, 1950* の各地域別農業賃金統計によって計算。

以上の検討は、われわれを次の結論にみちびく。すなわち、第二次大戦前後における農業の商業化の進展に基礎づけられて、第一に、小経営を犠牲にしつつ資本主義的大経営と半プロ的経営が増加した。商業的農業における資本主義的大経営の役割・比重は飛躍的に高まった。第二に、この変化は農業生産における賃労働の意義の増大と家族従事者労働の意義の減少、つまり農業の資本主義的性格の深化をもたらした。

IV 総 括

われわれは本稿の分析によって、かつての奴隷制プランテーション地帯の心臓部に位置し、全米で最もたち遅れた生産力しかもたないこの州の農業経営の内部にも、以下のごとき具体的形態をとって資本主義固有の諸特徴と諸矛盾が、強まりつつあることを示した。

(1) 大経営は、家族労働よりはるかに大量の賃労働に依存している点で³¹⁾、

30) ただし大内力氏のようにクロッパーを賃労働者と等置し、激減中のクロッパーを家族労働者数から引きさり賃労働者数につけ加えるならば、全く別の情景が描かれることになる。この等置の不当性については、別稿で言及したい。

31) レーニンが農業の技術的諸特性を考慮して、賃金労働者数が家族従事者数を凌駕している経営を全て「資本家的経営」に入れている。レーニン、現代農業の資本主義的構造、邦訳全案、第16巻、450ページ参照。

また技術的進歩(農業従事者1人につき最大量の機械の駆使・最も集約的な経営)と労働の社会化(従事者間の広範な協業と分業・生産物の最高の商品化率³²⁾)の先頭にたっており、その結果として最高の労働生産性を確保している点で、経営の資本主義的性格をくっきりと示している。この資本主義的な大経営は、まだ少数であるが、(1949年で全農場の1%強)、急速に増加しつつあり、この州の商業的農業の主人公たる地位を固めつつある。大経営の成長こそが、農業における技術的進歩と労働の社会化の前進および資本―賃労働関係の急速な拡大の主導者である。

(2) その対極に全農場の大多数(70%)を占める零細経営が位置している。これらは孤立分散した・技術的にたち遅れた・粗放的な・労働生産性の低い経営であって、多かれ少なかれ賃労働に従事しなければ暮していけない階層である。この階層のなかで、大経営との激烈な競争に敗北して、農業生産の舞台からますます後退しプロレタリア的性格を深める経営が急速に増えている。

(3) 零細経営のすぐ上には27%の小経営が位置している。比較的雇いも雇われもしないこの階層にあっても、大経営と比べると労働の分散性・孤立性・技術的たち遅れ・労働生産性の低さがめだつ。この階層は、大経営との競争に敗北して生産の縮小と賃労働の従事に移っていく経営と、生産を拡大し賃労働を使用しはじめる経営とへ急速に分裂しつつある。

(4) 大経営は賃労働者の雇用数の点では大規模に発達しているにもかかわらず、労働の生産性の点では全米平均よりも異常に低い水準にある。これはトラクターの本格的導入が北部や西部地方と比べて著しく遅れて始まったので、大経営における農業機械の使用がまだ低い水準にあることの結果に他ならない。つまりこの事実は、資本主義的大経営では、剰余価値生産の方法として、極端に安価な労働力の大量使用や労働日の延長等をより多く採用していること、その意味で資本主義的農業の発展の程度は、全米の水準よりもまだかなり低い水準にあることを物語っている。

32) 農業労働に占める家族労働の比重が最小の大経営では、生産物中の自家消費の比重もまた最小であり、社会的分業の網の目に最も強くくみこまれていることは、みやすい道理である。

補論 資本主義的農業生産の発展諸段階（デルタのばあい）

ミシシッピー州では、農業の資本主義化の程度は地域ごとに極めて不均等である。同州のなかで資本主義的大経営が、商業的農業の主人公として最も前面に進出しているのは、同州の西北端を占めるデルタ地域 **Yazoo-Mississippi Delta Area**³³⁾である（第10表）。この比較的狭い沖積氾濫原（全州農場面積の16%弱）に、同州の全クラス I 農場の実に73%が集中し、賃労働の65%、機械使用量（石油燃料換算）の54%が集中している。さらにこの地域における機械化は、畜力の役割を後景におしやる程度にまで進んでいる。このようにデルタ地域に大経営が集中するにいたったのは、ブランドフォン R. Brandfon が詳細に跡づけているように³⁴⁾、この地域が北部鉄道資本と英国綿業資本の投資に助けられて、19世紀末以降合衆国最大の良質棉花の産地へと急速に発展した結果である。そのためこの地域の大経営は、ほとんど棉作農場であるといっても過言ではない。

第10表 デルタ地域の経済的比重

	全州の総数	その内訳比率(%)	
		デルタ地域	その他の地域
農場面積	2,082万エーカー	15.7	84.3
農場総数	25.1万	22.7	77.3
内	クラス I	73.0	27.0
	クラス II	39.4	60.6
石油燃料支払額	1,651万ドル	53.5	46.5
賃金支出額	4,421万ドル	64.6	35.4
馬・騾馬の数	39.3万頭	13.3	86.7

出所 1950 Census, vol. 1, pt. 22, tab. 1・3・6・8 より作成。

33) デルタ地域は、Bolivar, Humphreys, Issaquena, Quitman, Sharkey, Coahoma, Leflore, Sunflower, Tallahatchie, Tunica, Washington の11郡を含んでいる。

34) R. Brandfon, *Cotton Kingdom of the New South—A History of the Yazoo-Mississippi Delta from Reconstruction to the 20th Century*, 1967 を参照。

したがってわれわれは、第二次大戦前後の資本主義的に発展しつつある大経営群の情景を、他ならぬ「棉花王国」デルタでこそ極めて大量的に・くつきりと観察することができるのである。そこでここでは対象をデルタの棉作大経営に限定して、資本主義的生産の発展過程の特質を段階的に検討しておきたい。

1. 1930年代 — 手労働・単純協業の優勢、トラクターの散発的導入

この時期の大経営の支配的な労働様式は、それ以前と同様に手労働と単純協業の優勢によって特徴づけることができる。すなわち棉作の主要行程では、あい変わらず手労働の様式（労働者が鋤・鍬等の農具＝道具を握って——あるばあいには騾馬の力を借りつつ、直接に土地や作物に働きかける）が続いていた。また同時に使用される労働者が一定数に達する行程では、単純協業が巨大な役割を演じており、労働の分割＝分業は、指揮者と一般労働者の間や棉作ととうもろこし栽培等との間の「商品別分業」に若干みられる程度であった³⁵⁾。

この時期に生じた新しい変化は、手労働と単純協業の設ける多少とも狭隘な技術的基礎上で、労働手段の改善、発達が着実に進展したことである。すなわち第一に、2頭、4頭の騾馬の同時使用の習慣の発達の結果として、農具が次第に改良され・多様化され・大型化された。例えば、元来鍬は一度に半畝をすくだけであったが、補助動力源としての騾馬の頭数の増加によって、2畝を一度にすく大型の鍬が出現するにいった³⁶⁾。第二に、大経営のここかしこで、動力機＝トラクターが姿をみせるようになった。もちろんそれは、この時期には手労働の単なる補充に留ったのであるが³⁷⁾、それにもかかわらずこの強

35) マルクスは単純協業それ自体の歴史的出現を「まだ手工的だった初期のマニファクチュア」とともに「マニファクチュア時代に相応したもので、本質的にはただ同時に充用される労働者の数と集積された生産手段の量とによって農民経営から区別される」ような「大農業」にみている。（マルクス「資本論」邦訳全集、第23巻、439ページ参照。）

36) 1929年のデルタの94の巨大経営（プランテーション）の調査書は、5頭の騾馬の同時使用の事例や「もっと大型の農具をもっと強力な畜力で引けば明らかに時間が節約できる」ことを報告している。（L. E. Long, *Farm Power in the Yazoo-Mississippi Delta*, *M. A. E. S. Bulletin*, 295, Nov. 1931, pp. 17-18.）J. L. Fulmer も、トラクター導入以前に棉作の労働生産性が増大した重要な原因として、「大型農具 multiple-row equipment の使用」をあげている。（J. L. Fulmer, *op. cit.*, pp. 61-62 参照。）

37) 同上の調査書によれば、巨大経営のうち約46% (66) がすでにトラクターを導入しているものの、散発的に使用されるだけであり、同書はその効率の悪さを歎いている。（L. E. Long, *ibid.*, p. 25.）

力な動力機の散発的・試験的導入自体が、逆に農具の道具機への発達に多かれ少なかれ刺激を与えることになった。この期の大経営の諸特徴——手労働・単純協業、機械の散発的利用——は、その資本主義的生産の発展形態を工業におけるマニュファクチュアと多くの類似点をもったものにして³⁹⁾。

2. 1940年代 — 機械制大農業への移行の開始

第二次大戦突入後の農業労働力不足とも関連して、1940年以降にトラクターはかつてない速度で普及しはじめた⁴⁰⁾。この動力機の棉作への導入は、マルクスによって理論的に解明されたように、旧来の農具の道具機への転化、すなわち「労働者の道具から 機構の道具へ」の転化をもたらした。そしてトラクターと一層精巧になった道具機との結合体としての農業機械の大量の出現は、デルタの棉作においてもその伝統的な労働様式を变革し（労働の規則性、適時で迅速な作業と深耕の保障、複数の労働行程の同時的遂行、協業と分業の一層の展開、婦人・児童労働の役割の増大⁴¹⁾、労働者の土地からの引きはなし）、労働の生産性を飛躍的に高めていった⁴²⁾。

しかしデルタの棉作におけるトラクターの大量導入は、それ自体としては「部分的機械化」を意味するにすぎなかった。なぜなら収穫行程はまだ機械化されていないので依然として一年で最も大量の手労働を必要としており、さらに大量の手労働確保の必要が、逆に収穫に先行する諸行程の機械化を多少とも不徹底なものにしてきたからである。

39) レーニン³⁹⁾は、機械がまだ重要な役割を果していない20世紀初頭のドイツの資本主義的大経営を同様に手労働と単純協業の支配、機械の散発的使用等によって特徴づけ、その際「近代の農業は……マルクスが「マニュファクチュア」と呼んだあの工業の発展段階に近づいている」と述べたブリュンクスハイムの指摘を肯定的に引用している。（レーニン「農業問題とマルクス批判家」邦訳全集、第5巻、135-136ページ。）

39) 「センサスによれば1945年のデルタの農場には、1940年より65%多いトラクターがあった。…1949年8月にデルタのほとんどのトラクター商人は、45年以後入荷したトラクターは飛ぶように売れていったと報告した。」(J. P. Gaines, G. B. Crowe, *Workstocks vs. Tractors in the Yazoo-Mississippi Delta*, *M. A. E. S. Bulletin*, 470, March 1950, p. 3.)

40) これについては、J. H. Street, *op. cit.*, p. 229 をみよ。

41) 「大型トラクターは少くとも10頭の驟馬と同じ量の仕事をする。」(J. P. Gaines, G. B. Crowe, *op. cit.*, p. 6.)

機械制大農業への移行のこの最大の障害をとりのぞいたのが自動摘みとり機 cotton picker の実用化 (1947年) であって⁴²⁾、摘みとり機の導入が本格化した1940年代末以降に、デルタにおける棉作の「全面的機械化」への前進が始まったといつてよい⁴³⁾。すなわち摘みとり機の導入によって、収穫前の諸労働の一層の規則性が必要となり (一様な巾と高さの畝たて・規則的な播種等)、したがってトラクターの大量使用と手労働の一層の駆逐がいわば摘みとり機の技術的必然となった。さらに新たな行程 (収穫直前の棉花の落葉等) が出現したり、雑草駆除のための火災放射中耕機⁴⁴⁾ flame cultivator や害虫駆除のための飛行機等の使用といった新しい機械の導入が一層容易となった⁴⁵⁾。こうして1950年代には、合衆国のなかで最も立遅れた農業をもつミシシッピ州においても、徹底的な機械化を実現した大経営 (機械制大農業)⁴⁶⁾ が現われ始めるのである。

このような機械化の進展が、大経営内の協業の一層の大規模化と協業にもとづく分業の展開 (単純労働者と機械運転手の分離等)⁴⁷⁾ を促進し、労働を簡単化し、労働者を土地から分離したこと、総じて資本の下へ賃労働を一層強く包摂するための手段となったことを強調しておかねばならない⁴⁸⁾。

42) 自動摘みとり機の導入過程は、G. B. Crowe, Mechanical Cotton Picker Operation in the Yazoo-Mississippi Delta, *M. A. E. S. Bulletin*, 465, July 1949 に詳しい。例えば「……自動摘みとり機は約35人の摘みとり手を不要にする。」(*ibid.*, p. 7.) また、F. J. Welch, D. G. Milley, Mechanization of the Cotton Harvest, *M. A. E. S. Bulletin*, 420 および E. B. Williamson・O. B. Wooten, Jr, F. E. Fulgham, Factors Affecting the Efficiency of Mechanical Cotton Pickers in the Yazoo-Mississippi Delta, *M. A. E. S. Bulletin*, 515, April 1954 も参照。

43) 「トラクターが部分的機械化のシンボルであるとするれば、自動摘みとり機は全面的機械化のシンボルである。」(J. H. Street, *op. cit.*, p. 165.)

44) C. B. Danielson and G. B. Crowe, Studies of Flame Cultivation in Cotton, Yazoo-Mississippi Delta, 1947, *M. A. E. S. Circular*, 143 Oct. 1948 参照。

45) この過程の技術的側面の一般的概説は、J. H. Street, *op. cit.*, chap. 6 が与えている。

46) プランティはこのような経営を Neoplantation と呼んでいる。M. Prunty Jr., The Renaissance of the Southern Plantation, *The Geographical Review*, Oct. 1955, pp. 482-484 を参照。なお土地所有諸関係の側面よりの Neoplantation の分析については別論に譲る。

47) すでにカウツキーは、近代農業における作業場内分業の展開の意義を指摘していた。K. Kautsky, *Die Agrarfrage*, 1899, 山崎春成・崎山耕作訳「農業問題」第1冊, 159-160ページ参照。

48) 合衆国のほとんどの文献は総じて機械化過程の技術的側面については詳細な検討を加えているが、このような社会経済的側面の考察を回避または軽視している。